ソード&マジック・ワールド

ストライク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ソード＆マジック・ワールド

【Ｎコード】
Ｎ５７０９Ｎ

【作者名】
ストライク

【あらすじ】

剣と魔法の世界『カルラディア』　己の才能と命を糧に怪物と戦う者、一攫千金を求めて命を奪う罠が無数に潜む迷宮に挑む者達がいた。
人々はそんな命知らず達を『冒険者』と呼んでいた。
この物語は剣と魔法の世界カルラディアで活躍する冒険者達の物語である。

注：この小説は元々同人ＲＰＧゲームとして作り上げたシナリオです。
製作が頓挫した為、このまま廃棄するのももったいなく思い、小説として発表させていただきました。
同人ゲームシナリオが元なので、どこか違和感があるかもしれませんがよろしくお願いします。

自由騎士アーウィンの物語　プロローグ（前書き）

無実の女性を救う為に、王の命令に背いた騎士アーウィン。
自らの良心と騎士としての使命、どちらに従うべきだったのか……。
騎士の位を剥奪され、思い悩む彼に王より今一度騎士に戻るチャンスが与えられた。
「アルムスと呼ばれる場所に赴き、秘宝を手に入れてくるのだ」
その使命を受け、アーウィンは友と共に旅に出た。世界の遥か果てにあると言われるアルムスに向かって――――。
だが、彼らの行く手には、思わぬ試練が待ち受けていた！！

自由騎士アーウィンの物語　プロローグ

プロローグ

帝国ダントーインの皇帝が住む城、ナイトパレス――――。

その偉容さは、まさにカルラディア最大の帝国に相応しいものだった。高い城壁と、八つの物見用の円塔に囲まれた、地上五階、地下一階からなる壮大な建造物だ。

その最上階にある皇帝の私室では、部屋の主人が卓上に地図を広げ、先ほどからじっと考えにふけっていた。

英雄皇帝の名前で呼ばれる現ダントーイン帝国皇帝、アルバート・デトロニクス・ダントーインその人である。

五十年前、土地も持たぬ下級貴族であった皇帝は前皇帝の崩御と共に発生した宰相（クーデター）の反逆を見事鎮圧し、幽閉されていた皇帝の忘れ形見である皇女を妻にし、皇帝の座に着いた。

すでに老境に入っており、その髪も見事な美髯も、ムスタファー山脈の万年雪のように白い。しかし、今だ背筋はまっすぐに伸ばされ、厳しく引き締められた表情は、王者のみがもちうる威厳をたたえていた。

しばしの間、アルバートは彫像のように動かず、白い眉をひそめて考え込んでいた。それから、やがて思いさだめた様子で、ゆっくりと卓上に手を伸ばした。

しわぶかい、枯れ枝を思わせるその指が、地図の上をダントーインから北西のブルーマを通って、その西コロールへと滑っていく。

「鋼鉄女王ネメアめ……何を目論んでおるのか……」

それは帝国ダントーインの北西に位置する軍事国家コロールにお

いて、女神の如く崇められている支配者の名前だった。

「懐刀と呼ばれた軍師マリアがブルーマに亡命していらい、コロールは存亡の危機に立たされておると聞く。だが、鋼鉄女王よ……」

皇帝の目が鋭くなり、野心の光が宿る。

「我が帝国が、コロールの滅亡を傍観しているとは思ってもらうまい」

アルバートは、ブルーマとコロールとの戦いに、直接介入すべきではないと考えていた。ひとたび皇帝が命令すれば、数万人単位の軍隊が組織され、他国に派遣される。それはカルラディア全土に戦火を巻き起こし、多くの命と未来を奪う事を意味するのだから。

だが、より大きな戦乱を避ける為、自ら戦いに乗り出さねばならぬこともある。

今こそ、皇帝の決断を下すべき時なのかもしれなかった。

「やはりブルーマに兵を送る為には、ギラン＝ブルーマ間の街道を整備しなおさねばなるまい……」

呟いて、アルバートは卓上の地図をたたんだ。

そして静かに立ち上がると、呼び鈴を振って侍従の者を呼んだのだった。

ダントーイン帝国に仕える騎士アーウィン・クエスターは、ナイトパレスの最上階へと続く階段を昇っていた。

アーウィンは、今年で二十五歳になる。帝国人に多い赤毛の髪と

茶色い瞳、気品ある顔立ちをしている。剣と馬術で鍛えられた体つきと、瞳の奥のひたむきな光りは、いかにも騎士らしいものだった。
カツカツと周囲に響く自らの足音を、アーウィンは酷く空ろに聞いていた。何の為に主君が彼を呼び出したのか、見当がついているのだ。
半月ばかり前、一人の貴族が殺された。アーウィンはその調査に当たり、事件の背後でコロールが糸を引いていると言う事実を掴んだ。しかし、事件の顛末をアーウィンから聞いた皇帝アルバートは、コロールの非を問おうとせず、殺された貴族の愛妾に罪を着せようとしたのである。
事実を明らかにすれば、コロールを討つべしとの声が騎士団や貴族達の間で高まる――――そして、ダントーインは準備不足のままコロールとの戦に突入せざるを得なくなる。皇帝アルバートは、そうアーウィンに説明した。無実の罪を着せてしまったが、彼女の名誉はいずれ必ず回復させる、とも。
濡れ衣を着せられたその女性を、アーウィンは監禁されている牢から逃がしてやったのだ。真相はともかく、表面的な事実だけを見れば、彼は騎士と言う身分でありながら、罪人を脱走させたことになる。
その裁きを下されるのだろう。アーウィンは王城の最上階にある、皇帝の私室に呼び出されていた。
公の場ではなく、皇帝の私室に呼ばれたのは悪い兆候ではなかったが、騎士としての資格を剥奪されるのは間違いあるまい。
階(きざはし)を一段昇るたびに、アーウィンは心が重く沈んでいく。
それでも、彼は機械的に足を繰り出し続け、やがて最上階に辿りつた。広い踊り場には、槍を構えた一人の衛兵が立ちはだかっている。
「騎士アーウィン・クエスター、皇帝陛下のお召しにより参りました」

アーウィンが告げると、衛兵は一礼して引き下がった。アーウィンも軽く頭を下げてそれに答え、廊下の突き当たりにある皇帝の私室へと向かった。
廊下の窓からは、暮れなずむ帝都ギランの街並みガ一望できる。それぞれの営みを抱えて帝都を歩く人々の姿は、五階からの高さから見ると、あたかも箱庭の小人のようだった。
だが、そういった風景に感慨を抱いている余裕は、今のアーウィンには無かった。
皇帝の私室に着くと、扉の前で控えている侍従に、アーウィンは来意を告げた。侍従が部屋に引き下がり、しばらく待たされてから、彼は部屋に通された。

「アーウィン・クエスター、参上いたしました」

中に入った所でアーウィンはひざまずき、頭を垂れた。謁見の間ではなく、皇帝の私室に呼ばれるのは初めてである。大きく息を吸ってから、アーウィンはゆっくりと顔をあげた。
彼の主君、アルバート皇帝は、卓に向かって何かしたためている所だった。その手を休めず、横を向いたままで、皇帝はアーウィンに語りかけた。

「来たか。今日、お前を呼んだ理由はわかっておろうな」
「はっ……」

皇帝はアーウィンに向き直り、鋭い視線でアーウィンを突き刺した。

「アーウィンよ。ノイアート卿が暗殺された事件において、お前は夜の命に背いた。今、我がダントーインはコロールと戦うわけには

いかぬ。よって真相を明らかにはせず、ごく一時の処理として、かの愛妾の女性を罪人として扱う……そう言った筈だ。だが、お前は彼女を脱走させてしまった」
「皇帝陛下、それは……」
「余が話しておるのだ。黙って聞け」

アルバート皇帝の声は大きくも激しくも無かったが、アーウィンの弁明を許さない威厳に満ちていた。
アーウィンは黙り込み、顔を少し俯けたまま、そっと主君の顔を盗み見た。
無罪の罪を着せられたその女性を何処に監禁してあるのか、それをアーウィンに教えたのは、他ならぬアルバート皇帝なのだ。ということは、皇帝は言外に、彼女を逃がしてやれとアーウィンに伝えたのではないか？　後になって、アーウィンはその事に思い至った。
だから、皇帝は自分の行動を賞賛しなくても、酷く咎めることは無いかもしれない……正直な所、そんな淡い期待を抱いてもいた。
しかし、ひざまづいたアーウィンを見据えるアルバート皇帝の表情は、あくまで厳しいものだった。

「騎士と言う身分でありながら、お前は罪人を脱走させた。その罪により、お前の騎士としての資格を剥奪する。所持品に紋章を刻む事、クエスター家の性を名乗る事は、以後許さぬ。また、叙勲の折に授けた武具と軍馬については、これを没収する。その上本来ならば、永遠にこの帝都ギランから追放するところだが……」
（お前の犯した罪、と皇帝陛下はおっしゃる。俺のした事は罪なのか？　彼女は無実なんだ。無実の人間が何故牢に監禁されねばならないんだ）

アーウィンは黙ったまま、心の中で叫んでいた。彼女を逃がしてやれと、皇帝陛下はお命じになったのではなかったのですか……そ

ういって慈悲を請いたかったが、アーウィンは誇りにかけて自制した。
　そんなアーウィンの内心に気づいてかどうか、アルバート皇帝はほんの少しだけ目元を和ませた。

「お前のとった行動は、ある意味では、まことの騎士として相応しいものであったのかも知れぬ。そこで、お前には機会を与えよう。アーウィンよ、贖罪の使命を受けるか」
「どういった使命でしょうか？」

　顔を上げて、アーウィンは問うた。

「アルムスに行け。そして、そしてかの地で秘宝を借り受けてくるが良い」
「アルムスの……？」

　アルムスはダントーイン帝国から遥か西の世界の果てとも言われる地にある小さな村だ。
　帝都ギランから発し、ロザミア、ザレス、ロマルを通って西部諸国へと至る。通称旅人達の街道と呼ばれる大街道の終点に位置するという。その正確な場所は定かではない。

「旅人達の街道を西へと進めば、やがてアルムスにつくであろう。村長（むらおさ）宛に書状をしたためておくゆえ、それを見せればよい。村長は、お前に秘宝を託すであろう」
「アルムスの秘宝とは、何なのでしょう？」
「それは、お前に話すことではない。どうするのだ、アーウィン。使命を受けるか否か」
「……」

頭を垂れて、アーウィンは目を閉じた。十五歳の時に叙勲を受けて以来、ダントーインの騎士としての勤めを果たしてきた日々が、脳裏に蘇っては消えていく。紋章入りの武具を帯びて、誇らしげに街を闊歩していたあの頃が、とても遠い昔のように思われた。

アーウィンは目を開けると、ゆっくりと顔を上げて主君を見つめた。

「……お引き受けいたします」

アーウィンにとって、選択の余地は無かった。使命を拒めば、待っているのは騎士資格の永久剥奪と言う、不名誉極まりない運命なのである。

アーウィンの答えに、アルバート皇帝は深く頷いた。

「よし。では、アルムスの秘宝を携えて戻ったあかつきには、お前の罪は許して使わそう。ただし、余の元に秘宝を届けるまでは、帝国に戻ってはならぬぞ」

皇帝の言葉に、アーウィンはもう一度深く頭を下げた。皇帝と言う立場上、アルバート皇帝としてはアーウィンを許すわけにはいかない。だが、皇帝は何とかしてアーウィンを庇おうとしてくれているのだろう。投げつけられた言葉こそ厳しかったが、アーウィンはそう感じていた。

「……御意」

しかし、主君の計らいに対する礼も、謝罪の言葉も、ついにアーウィンは口にしなかった。

自分のしたことは間違っていない。

そう信じていたから。

自由騎士アーウィンの物語　プロローグ（後書き）

ご意見ご感想などございましたら遠慮無く書いてください。
これからよろしくお願いします。

自由騎士アーウィンの物語　第一章「アルムスの末裔と幽霊騒ぎ　前編」（前書

剥奪された騎士資格を取り戻す為、ダントーイン皇帝から下された贖罪の旅に出たアーウィン。

アルムスの秘宝を求め、旅人の街道を西へと歩む。最初の中継地ロザミアへと辿り着いたアーウィン達は、宿泊した宿屋でアルムスの村出身の少女パーミルと出会う。

パーミルを旅の仲間に加えた翌日、宿屋で同時に起こった幽霊騒ぎと殺事件に巻き込まれ足止めされてしまった。

自由騎士アーウィンの物語　第一章「アルムスの末裔と幽霊騒ぎ　前編」

ダントーイン帝国首都ギランを出発してから、およそ三週間が過ぎようとしていた。

アーウィンの旅は、祝福されるべきものではない。だが、故郷を発ったあの日、騎士仲間達はひそかにギランの街はずれに集まってアーウィン達を励まし、その使命の成功を祈ってくれたのだ。

アーウィン達？　そう、彼は一人ではなかった。心強い二人の同行者が、彼の両隣につき従うようにして、共に旅人の街道を歩いている。

一人は濃紺の長衣（ローブ）を纏った、二十歳くらいの青年だった。ふっつりと切りそろえた金髪と、優しく澄んだ碧い瞳の持ち主だ。やや小柄で華奢な体格と、すっきり整った顔立ちは、繊細な水晶細工をを思わせる。

彼の名はサレンと言う。帝都ギランの魔術師ギルド所属の魔術師（ウィザード）である。幼馴染のアーウィンが贖罪の使命を課されたと知って、サレンは自ら協力を買って出たのであった。

「ロザミアまでもうすぐかい、アーウィン」

「さっき、道標が出てたろ。今日の夕暮れには着くはずだよ」

物思いに沈んでいたアーウィンに代わって、サレンの反対隣を歩いていル女性が答えた。

彼女の名はマイラ。半妖精（ハーフエルフ）の精霊使（スピリット・シャーマン）いであり、盗賊（ローグ）としての技術に長けている。アーウィンが、今回の使命を受ける原因ともなった事件をきっかけに、彼女はアーウィンやサレンと知り合った。彼女の能力を評価したサレンが、ぜひとも同行して欲しいと頼んだ為、マイラは帝都ギランを後にしたのである。

マイラは半妖精（ハーフエルフ）だから、正確な年齢は不詳であった。だが、人間

としてなら二十代前半くらいに見える。
そして、人間達の目にも彼女が美しく映えるのは、紛れもない事実だった。すっと切れ上がった琥珀色の目は猫のように、油断のなさと愛嬌を同時にたたえている。少し癖のある長い栗色の髪を背中で一つに束ね、すらりとした肢体を際立たせるような，ぴったりとした黒い皮鎧を着けていた。

「どうしたんだい、アーウィン。さっきから黙り込んで」

サレンがきづかわしそうに、旧友の顔を覗き込んだ。

「……ああ。何でもないよ」

アーウィンは、口元をほころばせて答えた。
現在の彼は、騎士としての資格を剥奪された身である。身に着けた剣と皮鎧は、騎士叙勲を受けた時の物ではない。一介の冒険者のように、出立前に店で買い求めた品だ。
例え一時とは言え、そのような品を身に着けることに、出立前のアーウィンは深い屈辱感を覚えた。世間の誰もが、彼を見て後ろ指を差しているのではないか、そう思えて仕方が無かった。自分のした事は間違いではないと、いちいち弁明して廻るわけにもいかないのだ。
しかし、彼の旅立ちを祝福してくれる騎士仲間と、そして何よりも心強い同行者達のおかげで、アーウィンには周囲の景色に目を向けるほどのゆとりが生まれた。
カルラディアは、今丁度春の気配に包まれていた。日ごとに少しずつ暖かさを増してゆく陽光が、街道を行くアーウィン達に優しく降り注ぐ。道沿いに植えられた木々は、小さな花のつぼみを芽生えさせていた。

「ロザミアについたら、二〜三日はゆっくり休むのもいいな。二人とも、疲れてるだろう？」

サレンとマイラに微笑みながら、アーウィンは言った。

「いいね。正直言って、少ししんどかったんだ」

サレンが答えた。緩やかな風を受けて、彼の柔らかい金髪がふわりと靡く。ロザミアの街までは、もうすぐであった。

ロザミアの街の酒場兼宿屋『イン・シルバーフォックス』は、閑散とした印象の店だった。

なまじ広い店であるだけに、今夜のように客が少ないと、一層がらんとして見える。

「帝都の酒場とは、やっぱり比べ物にならないね。料理は中々おいしいけど」

ワインのお代わりを頼みながら、マイラが言った。

ロザミアの人口は、およそ九万人。帝都ギランと比べても、そう遜色はない大きさである。ただ、場所が悪いせいか、この『イン・シルバーフォックス』はあまり活気のある店ではないようだった。

「……ああ、ありがと」

ようやく酒を運んできた給士娘に、マイラは礼を言った。

「意外な所で礼儀正しいんだね、マイラは」

「ちょっと前まで、こういった店で働いてたからね。あの娘達も大

変なんだよ」

サレンの言葉に怒りもせず、半妖精（ハーフエルフ）の女盗賊はグラスを口に運んだ。

「この国（ロザミア）が興ったのは、旅人達の街道が出来てからなんだよな……」

強い蒸留酒をゆっくりとすすりながら、アーウィンが呟いた。

ダントーイン帝国に生まれたアルムスと言う男が、東西の交流の為に、私財を投げうって帝都ギランから西へと延びる街道を作った……それは百年以上も昔の事である。

街道の工事の過程には、様々な障害があったという。他国との道が繋がる事が、侵略戦争の原因となるのではないかと考えた当時のダントーイン皇帝が、資金援助を打ち切ったこともあった。

だが、アルムスはそれに抗議することも無く、黙々と工事を続けた。多くの者は報酬が支払われなくなった為に去ったが、アルムスの志に打たれ、無償で彼に協力する者達もいた。

彼らが取り組んでいるのはダントーイン帝国一国の為ではなく、カルラディア東西に住む全ての人々の為の物だった。故に、彼らは国の束縛とは無縁にならざるを得なかった。

「街道は、人々の自由な心によって完成するのだ」

旅人の街道作りはそんなアルムスの諺が歴史に残るほどの偉業であった。

およそ五十年の歳月を経て、やがて街道は完成した。しかし、アルムス自身は街道の完成する二十年も前に、その生涯を終えている。

自らの夢が実現した光景を、目にすることもなく……。

今も、カルラディアの西の果てには東方の言葉を日常語にする小さな村がある。その村の名は、偉大なる指導者の名前を戴き、アル

ムスと名づけられている。
高貴な理想を抱き、偉業を成し遂げた先人の心に、アーウィンは思いをはせた。酔いが回ると、いつも彼は考え込みがちになる。
そんなアーウィンをつまらなさそうに見ながら、マイラはサレンの方に向き直った。そして声を潜めて――――――

「ねえ、サレン。あそこにいる女、ちょっと気にならない？」
琥珀色の瞳をちらりと動かして、彼女はカウンターの隅に視線を送った。

「どの女性？　ああ、確かに綺麗だね」
「そうじゃなくってさ」
的外れな返答をした魔術師（ウィザード）の頭を、マイラは軽く小突いた。

「顔じゃなくて、格好を見てごらんよ。どう見ても旅姿じゃない。なのに、連れはいないみたいなんだよね……」
いくら街道沿いに旅をするといっても、若い女性一人での道行は、やはり幾ばくかの危険が伴うのである。それでも、あえて旅に出るだけの理由があるのだろうか？
マイラは目を細めて、視線の先にいる少女の横顔を探るように見つめた。
その少女は。アーウィンよりも二～三歳下でだろう。まっすぐな黒い髪が、肌の白さを際立たせている。髪と同じ色の瞳は、長いまつげにふちどられ、幾分愁いを帯びているようにも見えた。

「まあ、そんなに気にしなくてもいいだろう。俺達には関係のないことさ」

アーウィンがそういったので、マイラはその少女を観察するのを止めた。
カウンターに並べられた料理の皿は、殆ど空になっている。追加注文をするか、二階に上がって休むか、アーウィンは少し悩んだ。
そして、彼の仲間の意見を聞こうと口を開きかけた時、隣に座っている中年男性の客と、店の主人との会話がアーウィン達の耳に入った。

「最近、この店には幽霊が出るんですよ。何でも、先代の時の泊り客のものらしんですがね……」
「へえ、幽霊だって？」

興味を引かれた様子で、アーウィンが横合いから尋ねた。

「詳しく聞かせてもらえないかな。俺達は今夜、此処に泊まらせて貰うんでね」

もうしばらく酒場にいることに決めて、アーウィンは酒のお代わりを頼んだ。

「あ、じゃあ私はワインね」
「僕にもエールください」
「はいはい、ありがとうございます」

手際よく料理を作りながら、宿屋の主人はアーウィン達の注文を給士娘に申し付けた。

「幽霊と言ってもね、そんな不気味なもんじゃないんですよ。二十歳そこそこの、綺麗な金髪の女性の幽霊なんです。そいつが出ると

いうもんで、客足が遠のいちまってね」

宿屋の主人はそう言って、愛想よく笑った。所謂典型的な宿屋の親父さんといった感じではなく、まだ若い、中々感じの良い青年である。男性としては少し小柄で、サレンと同じくらい華奢な身体つきをしていた。

「でも幽霊って、この世に未練や怨みを持ってる場合が多いんでしょ。泊り客に危害を加えたりするんじゃないの」

マイラが言った。

「まさか……」

宿屋の主人は笑いに紛らわせようとしたが、うそ寒そうな表情になって言葉を飲み込んでしまった。

「まあ、今更宿を変えるわけにも行かないしね。何事も無い事を祈っていますよ」

慰めるようにサレンは口を挟んだ。

「それに、そんな美人の幽霊なら、一度見てみたい気もするしね」

「明日にでも神殿の司祭様に来てもらったらどうだい。危害は加えないかもしれないが、祓っておいた方がいいんじゃないか」

アーウィンがそう述べると、宿屋の主人はそうですね、と頷いた。

（それにしても、幽霊が出るとか言う宿屋を、わざわざ選んでしまったとはな）

心の中で、アーウィンは苦笑した。運が良いのか悪いのか、とは、まさにこのことだろう。

「その幽霊について、何かわかっているのかい」

とりあえずアーウィン達の質問が終わったと見て、最初に宿屋の主人と話していた客が宿屋の主人に話しかけた。

「さあ、なにぶん先代の頃の話なんで、良く知らないんですよ。でも……確か、昔からの客の話じゃ、ソフィアとか言う女性の幽霊なんだそうです」

「ソフィア？」

その客は幽霊の名前を聞くとピクリと反応した。

「ええ。それがどうかしましたか？」

「いや……何でもない。じゃあ、私はそろそろ休むよ」

宿屋の主人の言葉にそう答えると、その中年男性の客はジョッキの中身を飲み干して、二階へと上がっていった。

「誰なの、あのおじさん？」

それを見送りながら、マイラが尋ねた。

「ああ。あの人はケルビンさんといってね。昔は、このロザミアの街で店を構えていたそうなんですが、今は息子さんに跡目を譲って、自分は各地を旅してるんだそうです」

「ふーん……」

何か引っかかるような表情で、マイラは細い眉をちょっとしかめた。

「あの人、あたし達が幽霊の話しをしてる間、ずっと聞き入ってたんだよね。やけに真剣な表情で。それに……」

マイラはアーウィンとサレンを見回していった。

「あの人って、ロザミアの人なんでしょ。それが、どうして宿屋に泊まるわけ？」

「確かにな」

あいづちをうって、アーウィンは腕を組んだ。

「何か事情があるんじゃないのかい。たとえば、息子さんの奥さんと仲がよくないとか」

「そうかもしれないけどね……」

軽い口調でサレンが言うと、マイラは不満げに黙り込んだ。気を取り直すようにグラスを取り上げ、ゆっくりと口に運びながら、彼女は内心で呟いた。

（ケルビンとかいったっけ。あいつ、どうも訳ありなんだよね……）

「すみませんが、一人にしておいて貰えませんか」

夜もそろそろ更け始めた頃、勘定を済ませて二階に上がろうとし

たアーウィン達は、固く強張った少女の声を耳にした。
先ほど、マイラが気になるといっていた、あの黒髪の少女だった。
あまり人相のよくない男が、彼女の隣に座って、仕切りと話しかけている。

「そう言うなって。一杯どうだい。俺が奢ってやるからよ」

早い話が、独りでぽつんと座っていた黒髪の少女を、男が口説いているのだった。何処の酒場でも見られるであろう一場面だ。
ただ、彼女の瞳に浮かぶ露骨な当惑と脅えの色を、アーウィンは見て取った。
となると、騎士道精神を叩き込まれて育った彼としては、放っておくわけにはいかない。
困っている女性には、必ず救いの手を差し伸べなければ。サレンとマイラに目配せして、アーウィンは、二人が座っているカウンターの隅に向かおうとした。

「ちょっと待って」

その横をすり抜けて、マイラがアーウィンの前に立った。

「あたしに任せといてよ。あんたが行ったんじゃ、余計に話がややこしくなっちゃう」

そう言うと、彼女はしなやかな足取りで、カウンターの隅へと近づいていった。

「まあ、ここはマイラのお手並み拝見といこうか」

サレンは言って、階段の近くで立ち止まったまま、マイラの手際

を見物することに決めた。渋々と、アーウィンもそれに従う事にした。
カウンターの隅についたマイラは、困惑して腰を浮かしかけている黒髪の少女に向かって、にっこりと笑いかけた。
「なあんだ。もう来ていたのかい、ミナ」
呆気にとられている黒髪の少女に片目をつぶって見せて、マイラは言った。もちろん、彼女が口にした名前はでまかせである。
呆気に取られていたのは男の方も同じだったらしく、言葉を失って口をパクパクさせている。その隙を突いて、マイラは少女の手をとって立ち上がらせた。
「あそこで、アーウィン達が待ってるんだ。早くおいでよ」
有無を言わさぬ口調で言うと、マイラは男に背を向けて、すたすたと歩き出した。マイラに手を取られたままなので、黒髪の少女もそれについていくことになる。
「お、おい……」
取り残された男の、限りなく間の抜けた声を背中に聞いて、マイラは思わずくすりと笑った。
「はい、ただいま」
突っ立っていたアーウィンとサレンに言ってから、マイラは連れてきた少女に向き直った。
「貴方が、嫌がってるように見えたもんだからね。お節介だったか

しら？」
「いいえ、そんな……。どうもありがとうございました」
少女の声は細く、美しかった。
「礼には及ばないよ。好みじゃないのに付きまとってくる男は、ハエよりもうっとしいからね。あの男が帰るまでは、あたし達と一緒にいたほうがいいよ」
「ええ……でも」
少女は戸惑っている様子だった。いきなり登場したアーウィン達を、警戒しているふうでもある。
それをほぐすかのように、マイラはにっこりと笑って見せた。
「大丈夫、あたしが保証する。二人とも、さっきの男よりはいい奴よ」
「あんなのと比べないで欲しいな」
苦笑いを浮かべて、アーウィンとサレンは異口同音に言った。
そしてアーウィン達は、先ほどの男から離れた卓につき、少女を交えて会話を始めたのだった。
もう十分に飲んだし、腹もくちくなっている。卓上にはアーウィン達が改めて注文した果汁のグラスが乗っていた。
「あたしはマイラ。よろしくね。この二人はアーウィンにサレンって言うんだ。あんたは？」
「私はパーミルといいます。……こちらこそ、先ほどはどうもありがとう」
「見たところ旅の途中みたいだけど、一人なの？」
「ええ……」

少女は、うつむきかげんに頷いた。

「旅人の街道があるおかげで道中は安全だけど、さっきみたいな奴もいるからね、気をつけないと」

マイラがそう言うと、パーミルと名乗った少女は黙って微笑んだ。どこか寂しげな笑顔だ、とサレンは思った。

「僕達も旅の途中でね。これから西へ向かう所なんだよ。ずっと、ずっと遠い西の方へ……」

いったん言葉を切って、サレンはちらりとアーウィンをうかがった。

「アルムスの村までね」

それを受け取ってアーウィンが言った。力むでもなければ、悲壮ぶるのでもない、いい表情だった。

「アルムスの村へ？」

パーミルは黒い瞳を大きく見開いた。

「どうしたの？　西の方に詳しいんだったら、あたし達に教えて欲しいんだけど」

「いえ……実は、私はアルムスの村の者なんです」

「なんだって！？」

アーウィン達は顔を見交わした。帝国で暮らしていた彼らは、遥

か西にあるアルムスの村について、殆ど何も知らなかった。旅人の街道の終点にあるといっても、具体的にはどのあたりに位置する村なのか、それすらも不明なのである。

「アルムスは、今から百年以上も前に、街道を作ったアルムス達が興した小さな村です。ドーレッドの街から北に少しいった所にあります……」

興味を露にして尋ねるアーウィン達に、パーミルはぽつぽつと語った。彼女は半年ほど前に村を出て、帝国までの旅をしたのだという。そして、ふたたびアルムスの村に戻る途中なのだそうだ。

ただ、なぜ村を出たのかを、パーミルは明かさなかった。また、はっきり語ったわけではないが、旅の途中で連れを失ったらしかった。

「そうだったのか……」

パーミルが口にしなかった事を、深く追求するつもりは、アーウィン達にはなかった。

出会ったばかりの他人に話すには重過ぎるものを、パーミルは背負っているのだろう。

それはアーウィンも同じである。彼とても、自分が資格を剥奪された騎士で、贖罪の為にアルムスの村に行かなければならないという事情は話していない。

「アルムスの村には、何か凄い宝物があるんじゃないの？　帝国の方じゃ、そういう噂なんだけど」

「宝物？　さあ……。私は知らないけれど、大した物はないんじゃないかしら。アルムスは、五百人ほどの小さな村ですから」

パーミルの言葉を聞いて、アーウィンの心に暗雲がよぎった。

（皇帝陛下はおっしゃったじゃないか。村長に皇帝陛下の親書を見せ、アルムスの秘宝を借り受けて来いと……）

あるいはパーミルが知らないだけなのかもしれない。だが、もしもアルバート陛下が、ありもしない宝を取りに行かせたのだとしたら？　アーウィンは帝国から永久に追放されたことになるのではないか。

（だとしたら……何故陛下は、いっそのこと追放をお命じにならなかったんだ）

アーウィンは考えてみたが、答えは見つからなかった。使命を果たしさえすれば……そんな思いを揺さぶる不安だけが、胸の中で膨らんでいく。

「さあ、そろそろあいつも行ったみたいだし。休もうか」

「ああ……」

沈んだ面持ちで頷き、アーウィンは立ち上がった。

元から空いていた店に残っているのは、彼らだけになっていた。

「あの……もし良ければ、アルムスまでご一緒してもらえませんか」

ごく控えめに、パーミルが申し出た。

「喜んで。アーウィンもサレンも、可愛いい女の子が増えていいんじゃないの？」

「もちろん構わないさ。若い女の子が、一人じゃ危ないしね」

碧い瞳に暖かな光を浮かべて、サレンは言った。
「じゃあ、明日の昼過ぎくらいに出発しようか」
胸中の不吉な思いを振り払うように、アーウィンは笑顔を作った。
それをしおに、四人はそれぞれの部屋に戻って、休む事にしたのだった。

アーウィン達と別れ、自分の部屋に戻ったパーミルは、来ていた旅用の服から夜着に着替えた。そして、脱ぎ捨てた衣服をきちんとたたんでから、彼女は寝台に身を横たえた。
窓の外には、夜空を埋め尽くすほどの星々が、おのがきらめきを誇るかのように光を投げかけている。
それを眺めながら、パーミルは物思いにふけっている様子だった。後にしてきた故郷を、思い出してでもいるのだろうか。
やがて、パーミルはそっと目を閉じた。
ほどなくして、彼女は規則正しい寝息を立て始める……。
そして、そのまま夜が過ぎ、空が白み始めた頃。
パーミルは苦しそうに、難度も寝返りを打ち始めた。眉を寄せ、首を左右に振っている。その動きに、彼女の黒い髪が頬に乱れかかった。そして小さな唇の間からは、言葉にならないうめき声が漏れる。
悪夢にうなされているのだ。それも極めつけの悪夢に。
パーミルが見ている悪夢は、彼女自身が殺される夢だった。
夢の中で、彼女は硬い石の上に横たえられていた。其処に、何者かが迫ってくる。完全な闇の中、それが誰なのかはわからない。ただ、そいつの手に握られた短剣だけが、禍々しく浮かび上がっている。

パーミルは逃げようとする。だが、手足を縛られていて体の自由が利かない。
彼女には、見ていることしかできないのだ。
無防備な彼女の胸目掛けて、今まさに短剣が鋭く振り下ろされるのを……！
自分自身の絶叫で、パーミルは目を覚ました。
肩で息をしながら彼女は上半身を起し、額に張り付いた髪を撫で付けた。体中が異様にだるく、冷たい汗にぐっしょりと濡れていた。
体を拭く為の水を貰おうと、パーミルは上着を羽織って部屋を出た。今の時刻なら、朝一番でパンを焼く料理人が起きているはずだ。
廊下を出たところで、パーミルは一人の給士娘に出会った。
水をいただけますか、と声をかけようとして、パーミルは気づいた。
立ち尽くしている娘の顔が、恐怖に凍りついている。彼女は手を上げて、震える指で一つの部屋の扉を指した。

「どうしたの？」
「あそこから、幽霊が……まさか、本当にいたなんて……」
幽霊が出て行ったという部屋からは、弱弱しい、男のうめくような声が聞こえてくる。
パーミルは、その部屋の前まで歩いていって、扉を叩いた。
「どうしたんですか。大丈夫ですか？」
返事はない。ノブに手をやると、扉には鍵がかかっていた。
「なんだ、パーミルじゃないの。何かあったのかい」
パーミルの声を聞きつけて、隣の部屋から顔を出したのは、半妖（ハーフエルフ）

精のマイラだった。彼女はちょうど、隣の部屋で休んでいたのである。パーミルから事情を聞くと、マイラは給士娘に、ただちに宿屋の主人を呼びにやらせた。

「この部屋にいる人は、どうしてるのでしょうか」

不安そうに、パーミルが言った。

「さあね」

上の空で、マイラは答えた。扉の向こうの声を聞き取る事に、彼女は全神経をを集中させた。

「……やばいかもしれない」

マイラは呟いた。彼女が聞いたうめき声の感じからして、扉の向こうにいる人物は、どうやら死に掛けているようだ。

マイラは一瞬だけ、唇を噛んで考え込んだが、すぐに決断して髪にさしたピンを抜いた。それを鍵穴に差し込んで、手馴れた様子で動かし始める。

とはいえ、いくら熟練した盗賊の腕を持ってしても、鍵を開けるのにはそれなりの時間がかかる。マイラが鍵と格闘している間にも、部屋の中から聞こえてくる声は、徐々に弱弱しい物になっていく。

焦ったマイラの手つきが、少し荒っぽいものになった。ピンが鍵穴を擦り、ガリッと音を立てる。それでも、何とか鍵を外す事はできた。

「見なかったことにしておくれよ」

パーミルに向かって言うと、マイラハ扉を開けて、部屋の中に入

った。そしてパーミルがそれに続き――――――彼女は悲鳴を上げた。
おびただしい量の血が、部屋の床に飛び散っていた。
そして中央には、一人の男が仰向けに倒れている。その旨の辺りからは、なおも血が流れ続けていた。傷の大きさから見て、短剣のような物で刺されたのだろう。先ほどの自分が見た夢を思い出して、パーミルは体を震わせた。
その男は、夕食の時に幽霊の話に聞き入っていたロザミアの元商人、ケルビンであった。大きく見開かれ、血走った目で、ケルビンはマイラを凝視している。
何かを伝えようとするかのように、ケルビンは血で汚れた手を上げ、いくどか口を開閉させた。
しかし、マイラが近づこうとした所でその手は垂れ下がり、ことりと力なく床を叩いたのだった。

「マイラ！　何があったんだ」

いつの間にか、宿屋の主人をはじめとして、多くの泊り客達が、部屋の前にやってきていた。その中にはアーウィンとサレンの姿もあった。

「見ての通りだよ」

アーウィンとサレンに向かってマイラは言った。

「あんたが殺したのか？」

血相を変えて、宿屋の主人がつめよった。フンと鼻を鳴らしたマイラを庇うように、パーミルが二人の間に割って入った。

「違うんです。この部屋から幽霊が出て行ったというので、見に行ったら、部屋の中からうめき声が聞こえて……」
「まさか、これは幽霊の仕業なのか……？」

泊り客の一人が呟いた。
その声は、どこか不吉な響きをともなって、人々の間を流れていったのである……。

自由騎士アーウィンの物語　第一章「アルムスの末裔と幽霊騒ぎ　前編」（後書

次回は「アルムスの末裔と幽霊騒ぎ　後編」を執筆します。
ちゃんとトリックと動機が描写できるといいな。

自由騎士アーウィンの物語　第一章「アルムスの末裔と幽霊騒ぎ　後編」（前書

剥奪された騎士資格を取り戻す為、アルムスの村にある秘宝を持ち替える使命を受けた元騎士アーウィン。

宿泊していた宿屋で起こった殺人事件のせいで足止めを食らったアーウィン達は、おざなりな捜査をする衛兵達とは別に、自分達で事件を解決する為に動き出した。

「私達がこの宿屋を出ちゃいけない……それは分かる。だが、足止めしたからには、さっさと真実を調べてもらいたいんだ！」

アーウィンは荒々しく、拳をカウンターに叩き付けた。怒りに満ちた眼差し――――――視線の先に油紙でもあれば、火がつくのではないかと思わせるほどだ――――――で眼前の人物を串刺しにする。

だが、アーウィンと向き合っている、その男は怯まなかった。

「我々衛兵隊はな、こぞって街道の警備に当たらなければならんのだ。このような事件に関わりあっている暇はない」

「街道警備？　ロザミアの衛兵が、なぜ街道警備なんかするのだ。衛兵達の管轄は、街の中だけのはずだろう」

アーウィンは尋ねたが男は取り合おうともしなかった。

「とにかく私が良いと言うまで、この宿を出てはいかん。いいな」

言い捨てると、男は踵を返して二階に上がっていった。その後ろから背中を蹴飛ばしてやりたいという、あまり騎士らしからぬ衝動に駆られたが、アーウィンは何とか思いとどまった。

二階に上がっていった衛兵は、ケルビンが泊まっていた部屋へ向かっていた。

部屋の前には、数人の泊り客達が見物に来ている。それを強引に押しのけて、衛兵は中に入って行った。

衛兵に少し遅れて二階にやってきたアーウィンは、野次馬に混じっているサレンとマイラの姿を見つけた。

「やっぱり駄目だった。しばらく、ここに足止めを食らう事になりそうだ」

近づいていって、アーウィンはサレンとマイラに声をかけた。

「まあ、あの衛兵の働きぶりに期待するとしよう」

悔しそうなアーウィンを慰めるように言うと、サレンは部屋を覗き込んだ。

すでに死体は運び出されているが、現場はそのまま保存されている。それを確認するだけ確認すると、なんと衛兵はすぐに部屋の外に出てきたのだ。

まったく何も調べようとせずに、である。

そして野次馬達が見守る中、衛兵は懐から巻物（スクロール）を取り出すと秘術（アーケイン・ロック）錠を扉にかけた。

「此処を捜索するのは三日ほど後になるだろう。何しろ、我々衛兵隊は、街道の警備で忙しいのでな」

何が忙しいものか……とアーウィンは衛兵の言葉に小さく舌打ちした。それに気づかぬ振りをして、衛兵はふとマイラに向き直った。

「そうそう、そこの半妖精（ハーフエルフ）。おまえだったな、死体を見つけたというのは」

「そうだけど？」

衛兵の横柄な口調に、呼ばれたマイラよりも、横にいるアーウィ

ンの方が緊張して身構えた。

「給士娘の話では、この部屋から幽霊が出て行ったとの事だが……お前がこの部屋には入れたと言うことは、扉の鍵は開いていたのか？」

「もちろん。決まってるでしょ」

けろりとして、マイラが答えた。実は、鍵は掛かっていた。彼女はそれをピンで外して、部屋に入ったのだ。

それを知られてしまえば、マイラへの容疑は決定的なものになってしまう。何かまずい事を言い出すのではないかと、マイラの横にいるサレンは、ハラハラして野次馬に混じっているパーミルを見た。幸い、パーミルは白い顔をうつむきかげんに伏せ、黙ったままであった。

「ふむ。確かに鍵穴には、何かでこじ開けたような跡があるが……」

考え込んでいるような表情を作って、衛兵は言った。

思わずマイラは天を仰いだ。よりにもよって、こんな無能者に、自分の不手際を見つけられるとは……！　盗賊（ローグ）としての自尊心を傷つけられて、マイラは憮然となった。

マイラの内心も知らず、衛兵は何やら思案を続けるようだったが、

「では、私は戻る。くれぐれも、この宿を出てはならんぞ」

そういい捨てて、すたすたと現場を去っていった。そして、後には何処か間の抜けたような沈黙だけが残されたのである。

事件を直ちに捜査しないうえ、足止めを食らわさせた衛兵の不熱

心さに、泊り客の不満は爆発する寸前だった。
それをなだめる為か、宿屋の若い主人は腕を振るって、昼食に豚の丸焼きやら鹿のローストやらを、泊り客に無料で奮発した。
食べ物で誤魔化すつもり？　とマイラはぼやいたが、足止めは主人のせいではないのだし、わざわざご馳走してくれるというのを断る理由もない。アーウィン達三人と、彼らに誘われたパーミルとは宿屋の主人の好意を受けることにして、先ほどから一階のテーブルに陣取っていた。

「それにしても、このままじゃあ、何時までここにいなくちゃならないのかわからないよ。此処は一つ、僕達の手で犯人を見つけて見せるべきだと思うんだ」

鹿肉を皿に訳ながらサレンが言った。

「ねえ、アーウィン。あんたが、ダントーイン帝国の騎士だって名乗り出るわけにはいかないの？　身元がはっきりしてるんなら、あの衛兵だって、外に出るのを許してくれるかもよ」
「それは……できない」

アーウィンは黙然と答えた。今のアーウィンが騎士だと名乗れば、それは身分の詐称である。少なくとも、彼がアルムスの村に赴き、村の秘宝を皇帝陛下の下に持ち帰るまでは……。

「足止めを食らって困っているのは、皆同じなんだ。僕達が捜査するといえば、他の泊り客だって、犯人を突き止めるのに協力してくれると思うよ」

場をとりなすように、サレンが言った。

「犯人が、この宿屋に……」

黒い瞳に脅えの色を浮かべて、パーミルが周囲を見回した。

「ケルビンを殺したのが、幽霊の仕業じゃないとすればね」

マイラが、面白くもなさそうな口調で言った。

「それに、調べるというけどな、サレン。ケルビンが泊まっていた部屋には、秘術呪文（アーケイン・マジック）の鍵がかけられてるんだぞ」

アーウィンが言った。するとサレンは、柔らかい金髪を揺らして悪戯っぽく笑った。

「秘術呪文（アーケイン・マジック）で閉ざされた扉は、秘術呪文（アーケイン・マジック）であけることが出来るのさ。誰かに見つかると、ちょっとまずいけどね」

魔術師（ウィザード）は自信ありげに言った。

「そういうこと。あたしとサレンで、ちょっと例の部屋を調べてくるよ。客達が二階に戻らないうちにね」

「おいおい……」

心配そうなアーウィンに、マイラは片目をつぶって見せた。

「大丈夫。ヘマはしないって」

「鍵穴に傷痕を残すようなヘマはね」

サレンがからかうと、マイラはすねるような表情を作った。

「……まあ、とにかく行ってくるよ」

そう言うと、マイラはさりげなく立ち上がり、客達の注意が逸れている時を見計らって、二階へと上がっていった。じゃあ、と言葉を残して、サレンがそれに続く。

後には、アーウィンとパーミルの二人が残された。

昨夜、出会ったばかりの二人である。

なんとなくぎこちない沈黙が落ちた。

「何かわかるといいんだが……」

パーミルを気詰まりに感じさせてはと、アーウィンが取ってつけたように言った。

「そうですね」

ちょっと作り笑いめいた微笑で、パーミルが答える。

「アーウィンさんも、アルムスの村に行かれるんでしたよね」

「ああ……」

まだ、パーミルに自分の使命について明かすつもりはなかったので、アーウィンは短く答えた。そして、私のことはアーウィンでいいよ、と付け加えた。

「昨日言った様に、私も村に戻るところなんですよ」

「そうだったな。じゃあ、あのアルムス達の末裔と言うわけなんだね、貴方は……」

「あなた、だなんて。私の方が、どう見てもアーウィン……さんよりも年下なのに」

パーミルは、恥ずかしそうに笑った。
その笑顔を見たアーウィンは、奇妙な事だが、ふと彼女の旅にも何か深い事情があるような気がした。
「旅人達の街道を作った人々の偉大さは、吟遊詩人(バード)達が語っている事だからね。その子孫達も、やっぱり敬意を払うに値すると思う」
「私の祖先たちが、偉大な人々だと……？」
パーミルは、なぜか複雑な表情を見せた。その理由がわからないまま、アーウィンは彼女を励ますように頷いた。
「ああ、彼らがいたからこそ、カルラディアは東西の交流ができたんだ。それに、このロザミアだって、街道が出来て初めて興った国なんだから」
「ええ……」
パーミルは微笑んだ。
「あ。あの娘は……今朝、幽霊を見たといってた給士の人だわ」
パーミルの視線は、アーウィンの後ろの方に向けられていた。それを追う様に、アーウィンは顔を振り向かせた。
そして彼は、ちょうど暇そうにたっているその給士娘に手を上げて、自分達のテーブルに呼んだ。
「サレン達ばかりに苦労はかけられないからね」
アーウィンはパーミルに言った。

「ああ、ちょっと時間を取らせてすまないんだが……君が見た幽霊の話というのを、詳しく聞かせてくれるかな？」

やってきた給士娘に、アーウィンは質問を始めたのだった。

「あの二人、どんな話をしているんだろうね」

殺されたケルビンの部屋の前に着くと、マイラはくすっと笑った。

「アーウィンは、不器用なくせに気を使うからねえ……」

サレンも笑ったが、すぐに表情を引き締めると、自分の部屋から取ってきた魔術師の杖（ウィザード・スタッフ）を構えた。

美しい旋律にも似た秘術魔術の詠唱が、彼の薄い唇から流れ始める。

ほどなくして、青白い光が一瞬だけ扉を包み、そして消えた。

「開錠（ノック）の秘術魔法（アーケイン・マジック）で開いたよ」

ふうっと息をついて、サレンがいった。

「ごくろうさま」

マイラは言って、そっと扉を押し開けた。それから二人は周囲に誰もいないことを確認して、部屋の中に入っていった。

此処から先は、盗賊（ローグ）であるマイラの仕事だった。彼女は屈みこんで、死体のあった場所を調べたり、部屋の隅に置かれた荷物の袋を改め始めた。

「僕は、もう戻っていようかな」

マイラの捜索振りを所在無さげに眺めながら、サレンが呟いた。

「だめだめ。あんたには、後で扉に魔法の鍵の呪文(アーケイン・ロック)をかけてもらわないと」

荷物の中身を調べながら答えたマイラが、ふとけげんそうに手を止めた。

「これは……」

彼女が取り出したのは、白っぽい液体を満たした小さなガラス瓶だった。封は切られていない。

「それがどうかしたのかい、マイラ」

「ちょっと、心当たりがあってね」

少し考えてから、マイラは瓶の封を破った。そして栓を開けて、彼女は小瓶を鼻先に持っていった。

目を閉じると、マイラはまるで香水の配合を見る調香師のように、掌で瓶の口元を仰ぎながら匂いを嗅いだ。

「……間違いないね」

ゆっくりと目を開けて、彼女は言った。その琥珀色の瞳が、鋭く光っている。

「これは毒薬だよ。それもかなり強い、ね。暗殺者(アサシン)達がよく使うや

つで、お酒なんかに混ぜて飲ませる毒なんだけど……
「そんな毒を、どうしてケルビンがもっていたんだろう？」
マイラが疑問に思ったのも、まさにその点なのだった。
彼女は小瓶を袋に戻すと、さらに入念に部屋を調べ始めた。一通り調べ終えて、マイラは首をかしげた。
「どうかしたのかい」
「ないのよ。……金目の物が。銀貨が五十枚ほどもってただけで」
「おいお、マイラ。泥棒するつもりかい」
「そうじゃないのよ」
マイラは舌打ちして、サレンを軽く睨んだ。
「旅をするんだったら、いくら何でももう少し持ってて当然じゃない。宝石とか、貴金属とかの形でさ。それが見当たらないのよ」
「ケルビンが身に着けてたんじゃないのかい」
「違うと思う。死体が運び出された時には、そういった物は何も身に着けてなかったはずだ物。だいたいね、サレン。あんただったら、指輪や首飾りしたままで寝る？」
「言われてみれば、確かにそうだけど……。じゃあ、マイラ。たぶん……」
「そうよ。あたしが言いたいのも、たぶんサレンと同じ事よ」
そう言って、マイラは注意深く、部屋を元通りの様子に戻し始めた。
それを終えてから、サレンとマイラは部屋を後にしたのだった。
もちろん、扉に魔法の鍵（アーケン・ロック）をかけておくことを忘れずに……。

サレンとマイラが一階に戻ってきてから、アーウィン達四人は、宿屋の人々や泊り客達に、事件の事を聞いて廻った。
そして夕方ごろになって、彼らは隅のテーブルに固まって座り、それぞれが得た情報を交換し始めた。
外出もかなわず、他に楽しみもないためだろうか。一階の酒場には早くも泊り客のほとんどが詰めかけ、酒や早めの夕食を注文し始めている。
だが、やはり不安なのだろう。彼らの雰囲気は、どこか落ち着かないものだった。幽霊にせよ、人にせよ、ケルビンを殺した者は、いまだこの『イン・シルバーフォックス』にいるのである。

「……というわけで、ケルビンは殺される三日前から、この宿に泊まっていたそうだ。その頃から幽霊の事について、色々主人に尋ねていたらしい。其方は何かわかったかい？」

そんな客達の様子を見回してから、アーウィンは中間達に尋ねた。

「いろいろとね」

声を潜めて、半妖精（ハーフエルフ）のマイラが言った。

「ケルビンの荷物を調べたら、毒薬が見つかったのよ。暗殺者（アサシン）達達の使うやつがね」
「ケルビンが、暗殺者（アサシン）だとでもいうのかい」
「まさか。毒が欲しいんなら盗賊ギルドで買えばいい。闇市っていうのもあるしね。気になるのは、ケルビンが何の為に、そんな物を持っていたかってことよ」
「元商人と毒薬……確かに妙な取り合わせだな」

アーウィンが言った。

「まあ、この事件とは関係がないのかもしれないけどね」
慎重に、マイラは付け加えた。そして彼女に代わって、魔術師（ウィザード）のサレンが言葉を引き継いだ。
「それから、ケルビンは旅の途中なのに、金目の物を持ってなかったんだ。普通なら、宝石なんかを持ってるんはずなんだけど」
「なるほど。と言うことは……」
「そう。奪われたんだと考えるのが、一番自然じゃないの。つまり、ケルビンを殺したのは人間よ。幽霊が、お金を欲しがるはずがないもんね」
「しかし、この宿の給士娘は、確かに幽霊らしき姿を見てるんだ。部屋を出て、廊下を歩く金髪の女性の後姿を」
それはアーウィンが先ほど、パーミルと二人でいたときに仕入れた情報である。長い金髪を持つ女性は、泊り客の中にはいない、それは確認済みであった。
「あの時の娘さんの脅えようは、普通じゃありませんでしたよ」
遠慮がちに、パーミルが言い添えた。昨日見た夢のことを話そうかと一瞬迷ったが、彼女は黙っておく事にした。
「たしかに……あの部屋の鍵は、確かに閉まっていた。あれをあけたのはマイラマイラなんだから。鍵を開けることなく部屋に出入りしたとなれば、やっぱり幽霊の仕業じゃないのか」
なんとなく薄ら寒そうな表情で、アーウィンが言った。

「まあ、他にも方法がないわけじゃないけどね」
「と言うと……？」
小首をかしげたパーミルに、マイラはうなずきかけた。
「簡単な事よ。合鍵を使って出入りすればいい」
「鍵？　でも、鍵は部屋の中にいるケルビンさんが持ってて……あ！」
納得した様子のパーミルを見て、マイラは得意げに微笑んだ。
「そう。鍵は一つきりとは限らない。予備の合鍵を持っている人間がいたって不思議はないでしょ」
「盗賊（ローグ）ってやつは、鍵といえばいつも、七つ道具でこじ開けることしか考えてないと思ってたよ」
おかしそうに言ったサレンは、ふと真顔になって、
「予備の鍵を持っているといえば、まず考えられるのが……」
「そういうことね」
マイラはちらりとカウンターの奥をちらりと見た。
彼女の視線の先では、主人が客とにこやかに話をしながら動き回っている。
「なるほど。しかしなあ……」
アーウィンは腕を組んだ。
「予備の鍵を使って泊り客を殺したりしたりすれば、真っ先に疑わ

れるのは主人じゃないか。そんな馬鹿なことをするかな」

アーウィンが疑問を口にした。それに賛成するように、パーミルも小さく頷いている。

「幽霊の仕業に見せかけようとしたんじゃないの、きっと。ありそうな話じゃない。この店は暇そうだし、借金でも抱えてるのかもよ」

「でも、確かに幽霊を見た人がいるのですよ」

パーミルがごく控えめに反論する。

「そうなんだよね……」

マイラは黙り込んだ。カルラディアには不死の怪物（アンデッド）が実在する世界である。本当に幽霊がいたとしても、なんら不思議はないのだ。誰かが幽霊を操ってケルビンを殺し、金品を盗ませたということも考えられるのである。

「まだ、結論を出すには早すぎるよ。もう少し調べてみないと」

サレンが言った。

衛兵の応対から考えると、彼らが解放されるのは何時の事なのか、知れたものではない。アーウィンは、一日でも早くアルムスの村に着きたくて、かなり焦っていることだろう。とりあえず、手がかりがある限り、サレンは衛兵に代わって事件を調べるつもりでいる。

「それにしても、僕はどうも気になるんだ。ケルビンが持っていた、あの毒薬がね……」

「暗殺者（アサシン）の使う猛毒よ。ケルビンは誰かを殺すつもりだったのかしらね」

「ケルビンが殺された事とは、関係がないかもしれないかもしれないんだろう。まあ、少なくともあの毒は、人の生命を奪うための物なんだろう……」

何気ないアーウィンの呟きを、ふとサレンは聞きとがめた。

「人の生命を奪う物……」

サレンはなんとなく、漠然とした事実の姿を垣間見たように思った。

「なあ、アーウィン。確か、ケルビンは殺される三日前にこの宿を訪れてるんだったね。彼は幽霊を見たのだろうか……」

「さあ、ありえることだろうけど……それがどうかしたのか、サレン」

アーウィンの問いに、サレンは曖昧な笑みを浮かべた。

「いや。ちゃんとしたことがわかるまでは、言わない事にするよ。もし間違ってたら恥ずかしいからね……」

アーウィン達は夕食を済ませると、サレンを残して二階に上がって行った。

それを見送って立ち上がったサレンは、意外な人物が入ってくるのを見た。

（法の神グラックスよ。ご加護をありがとうございます）

サレンは心の中で自身が信仰する神に感謝を捧げた。今日、客達

に足止めを指示して立ち去ったあの衛兵が、また戻ってきたのだ。
「すいません。ちょっと頼みたい事があるんです」
衛兵に近づいていって、サレンは声をかけた。
「何だ、君は？」
返ってきたのは、うさんくさげ声と視線だった。
「この宿屋に出る幽霊っていうのが、どうしても気になるんですよ。何でも、先代の主人の頃の、泊り客の幽霊だとか……。そこで、貴方に立ち会っていただいて、此処の宿帳を調べたいんです」
無言でサレンを見ていた衛兵は、ふと彼の胸に下げられた聖印に目を留めた。
「グラックスの司祭殿か」
「ええ。なんとかお願いしますよ」
衛兵は鼻を鳴らした。グラックスの信者なら、書物と睨めっこしてるのがお似合いだ！　そう言いたげであった。
しかし、さすがにサレンの頼みを断りはしなかった。宿帳をしらべるくらい、たいした手間でもないからだ。それに、ここまで下手に出られては、断り辛いということもある。
と言うわけで、サレンは衛兵と一緒にカウンターまで歩いていって、その奥で働いている主人を呼んだ。
「ちょっと、昔の宿帳を見せて欲しいんですが……」
「宿帳を？」

サレンの言葉に、主人は怪訝そうな顔を見せた。

「ええ。此処の娘さんの見た幽霊っていうのが、どうしても気になるんですよ。だから、調べてみたいと思いましてね」

サレン一人が言ったなら、恐らく主人は断っただろう。しかし、彼の横には衛兵がいる。

ちょっと待ってください、といって、主人は奥の部屋に引っ込んだ。それからしばらくして、彼は両手に羊皮紙の束を抱えて戻ってきた。

「どうぞ、ご覧になってください」

「では、ちょっとお借りしますよ」

主人から宿帳を受け取り、サレンはカウンターの隅に腰を下ろした。古くなった羊皮紙を傷めないように、そっと頁を捲る。

衛兵もサレンの隣に座って、一応宿帳を覗き込んでいる。だが、調べ物に没頭しているサレンは、やがて衛兵の存在すら忘れていた。

（ここにあるはずなんだ。ロザミアに帰る場所のあるケルビンが、あえてこの宿屋に泊まった理由が……）

はたして、サレンは求めているものを見つけた。

十年前の泊り客の名簿に、ケルビンの名前が記されていたのである。

（このときも、ケルビンはわざわざ宿に泊まっているんだ）

そして、そのすぐ横には女文字で、ソフィアという名前が……。

それは、幽霊になったという女性の名前である。今、幽霊となってこの宿に出没すると言う事は、彼女はもう死んでいるのだろうか？
サレンは一心に考え込んだ。
殺されたケルビンと、このソフィアと言う女性とは、なんらかの関係があったのだろうか。もしそうだとしたら、ケルビンはどういう目的で、わざわざこの宿にやってきたのだろうか。

（幽霊となったソフィアさんに、会いに来たんじゃないだろうか）

ふと、サレンは思った。

（だとしたら、あの毒は……）

サレンの頭の中で、一つの推測が形作られてゆく。真相の全てがわかったわけではない。だが、ケルビンが何の為にあの毒薬を持っていたのかについては、見当がついたような気がする。
サレンは宿帳から顔を上げて、衛兵に言った。

「……もう一つだけ、頼みたい事ができました」
「何か？」
衛兵は憮然としたが、次の瞬間には喜んで協力してくれるであろうことを、サレンは確信していた。

「労せずして手柄を立てられる、良い機会ですよ。僕は考えたんですよ。つまり……」

サレンが推測を語って聞かせると、衛兵は目の色を変えて外に飛び出して行った。

（ソフィアと言う女性の死には、きっとケルビンが関わっているに

ちがいない。あの衛兵に過去の記録を調べてもらえれば、何かわかるはずだ……）

衛兵が、望みどおりの真実を運んできてくれる事を、サレンは神に祈った。

法を守護するグラックスこそが、彼の祈るべき神なのであった。

ちょうどサレンが宿帳を調べ終わった頃。

マイラは姿隠し（インビジビリディ）の呪文を使って、カウンターの奥にある厨房に忍び込んだ。

客の目には触れない場所であるせいか、其処は意外なほど散らかっていた。洗ってもいないまな板や包丁が、調理机の上に雑然と置かれている。大きな鉄釜のふちには、乾いたスープがこびりついている。何種類もの料理の発する臭いが交じり合って、マイラの嗅覚を刺激した。

厨房には誰もいなかった。料理人も兼ねている主人は今、カウンターに出て客達の相手をしている所なのだ。厨房の奥の方には、さらに主人の私室へと通じる扉があった。

其方に歩み寄ろうとしたマイラは、ふと調理机の上に目をやった。

其処には、解体された鹿の脚が、これはさすがに目立たないように置かれていた。

それを見て、マイラは激しく顔をしかめた。無残な物を見て、嫌悪を覚えたからではない。

思い出したのだ。ダソミアの森での忌まわしい出来事を。

取替え子の半妖精（ハーフエルフ）として、両親にさえも忌み嫌われる日々に嫌気がさし、マイラは生まれ育った帝都ギランを飛び出した。そして、自分を受け入れてくれる場所を求めて、森妖精（エルフ）達が数多く住むダソミアの森へと旅立った。森妖精（エルフ）達ならば、あるいは自分を同胞として認めてくれるかもしれない……そう考えたのである。

旅の途中で、マイラは一人の同行者が出来た。冒険者風の格好をした青年である。妹のマーリを除いては、マイラに親切にしてくれた、ただ一人の人間だった。わざわざ寄り道をして、彼はマイラをダソミアの森まで送り届けてくれたのである。

長い旅の末に、ようやく二人はダソミアの森の端までたどり着いた。その日は、其処まで来たところで太陽が沈んだので、森の中で野営をすることにした。

屋外で夜を明かす時はいつも、二人同時に眠る事はなかった。森にすむ魔獣や妖魔の襲撃に備えるためだ。だが、旅の疲れが溜まっていたせいか、見張りに立っていたマイラの連れが、つい眠り込んでしまったのである。

何者かに寝込みを襲われることは、幸いにしてなかった。しかし、焚いていた火が風に煽られ、手がつけられないほどに大きくなってしまったのだ。慌てて目を覚ました時には、すでに遅かった。炎は闇の中で踊り狂い、周囲の木々を飲み込んで、ますます激しく燃え上がった。

その時十数人の森妖精(エルフ)達が、風のように現れたのだ。

彼らは精霊魔法(スピリット・マジック)によって水の精霊(ウィンディーネ)の力を借り、呆然とする二人には目をくれず、必死になって炎を消し止めた。そして、何とか炎を鎮めた後で、初めて森妖精(エルフ)達は二人に向き直った。

彼らの瞳には、凄まじいほどの憎悪が宿っていた。

「すまない。でも、わざとしたことじゃないんだ……」

二人を取り囲み、じりじりと近づいてくる森妖精(エルフ)達に、マイラの連れの冒険者の声は尻すぼみになった。

「森を荒らす侵入者……死ね」

後になってマイラが知ったことだが、二人が遭遇した森妖精(エルフ)の部

族は、森を荒らす侵入者や魔獣などを捕えると切り刻んで森の糧とするのを習わしとしていたのである。
マイラの同行者は弁解すら許されず、文字通り細切れにされて殺された。
絶叫が上がり、血しぶきがほとばしった。大切な仲間がなぶり殺しにされるのを見ながら、マイラは恐怖のあまり、身動き一つ出来なかった。切り刻まれた獣などを見ると、今でもあの時の光景を連想してしまうほどだ。
体に流れる森妖精（エルフ）の血に免じてかどうか、マイラは危害を加えられなかった。しかし、森妖精（エルフ）達と共に暮らすなど、到底不可能だと彼女は思い知らされた。
仲間の復讐を考えたこともあったが、結局マイラは帝都ギランに戻る事にした。そして、悲しみと絶望を少しずつ癒しながら、再び人間達に混じって暮らし始めた。自分を受け入れてくれる場所を探し続け、そして彼女はようやくそれを見つけた。
盗賊ギルドである。
器用さと俊敏さに恵まれた半妖精（ハーフエルフ）の彼女は、盗賊達に混じって生きているうち、彼らの持つしたたかな判断力と冷静さを身につけていった。
しかし、切り刻まれた獣などを目にした時だけは、マイラは別人ともいえるほど性格が変わってしまうのだ。恐ろしく高慢で、病的なほど潔癖になってしまうのである。日頃は嫌悪し、押さえつけている森妖精（エルフ）としての性が顔を覗かせるのだろうか。
今のマイラはまさしく、優れた盗賊（ローグ）としての観察力を失っている状態だった。
調理台の上には、血にまみれた包丁が無造作に置かれていた。獣肉を料理した時の血なのだろうと、マイラは気にも留めなかった。
そして、彼女は私室への扉に向かった。
七つ道具を取り出し、鍵をこじ開け始める。
いまひとつ作業に集中できない。こんな汚い部屋に留まる事が、

今のマイラには耐え難かった。息をするたびに、むかむかと吐き気がこみ上げてくる。一呼吸ごとに、胸に黴が生えて行くような気がした。

幾分震える手で、ようやくマイラは鍵を外す事ができた。

主人の私室に入ってみると、其処は厨房と同じく乱雑に散らかっていた。いくら独り身の男の部屋だと言っても、酷すぎるほどだ。

「汚い」

自分の漏らした呟きに、マイラは気づいていなかった。

物音も高く、マイラは部屋を調べ始めた。宿の主人に見つかっては、などと言う考えは思いつきもしなかった。

（なぜだろう……探せば探すほど、部屋が汚くなっていく）

片付けているのではないのだから、当然である。むろん、こんな状態で手がかりなど見つけられるはずはない。舌打ちしたマイラは、再び激しい吐き気に襲われた。

片手で口を押さえて、マイラは厨房の方に走っていった。慌てて閉めた私室の扉がばたんと大きな音をたてたが、気に留めている余裕はなかった。

調理台の近くに行くと、マイラはその下にあった屑入れに、先ほど胃に収めた夕食を全て吐いてしまった。

吐くものがなくなって、咳き込みながら顔を上げようとしたマイラは、、ふと屑入れの其処に光る金色の物を見つけた。

血と汚物にまみれたそれを、マイラが顔をしかめつつ引っ張り出そうとした時、ランタンを手にした部屋の主が、血相を変えて厨房に飛び込んできた。

「なんだおまえは！この泥棒女め！」

怒鳴る主人の鼻先にマイラは手にした物を突きつけた。
「笑わせるんじゃないよ。あたしが泥棒なら、お前は人殺しじゃないか」
マイラは冷たく言い放った。
「な、何だと……」
主人は鼻白んだ。マイラが見つけたのは、長い金髪のカツラであった。それをぽいっと投げ捨てて、彼女は唇を歪めた。
「これをかぶって、幽霊に変装したんだろ。あんたの体型じゃ、後ろから見れば女に見えないこともない」
「そんな物証拠になるか！だいたいおまえは、何の権利があって俺の部屋を荒らしてるんだ！」
主人は喚いた。その声を聞きつけて、厨房の方から四人の人間がやってきた。
アーウィンとサレンとパーミル、そしてあの衛兵だった。
「観念するんだな。店の経営が苦しくて、お前がかなり借金してる事はわかっているんだ」
厳しく叩き付ける様に、アーウィンが言った。
「くだらん。強引なでっちあげだ……」
と、主人がせせら笑ったその時。

彼の手にしたランタンの炎が、風もないのに激しく揺らめいた。そしてあたかも何物科の吐息に吹かれたかのように、フッと消えてしまった。

「何かいる……」

パーミルは囁いて、ぞくりと身を震わせた。アーウィンもその気配を感じ、緊張して身構える。

闇の中、青白い光が浮かび上がった。それは徐々に大きさを増し、おぼろげな人の形を散りつつあった。

「……ケルビン！」

宙に浮かんだ、青白く透き通るその人影は、まさに殺されたケルビンの姿だった。

ケルビンの手がゆっくりと持ち上げられ、絶句している宿屋の主人を指差した。

「幽霊だ」

サレンが呆然と囁いた。

「お前が私を殺したんだ」

地の底から響いてくるかのようなその声に、宿屋の主人は腰を抜かしてへたりこんだ。

「わ、悪かった。俺が悪かった。だから助けてくれえ！」

絶叫している主人の肩を押さえて、サレンはケルビンの幽霊に向

き直った。

「……もう、ソフィアさんへのお詫びはすんだのですか？　十年前、貴方が死なせてしまった、かつての恋人へのお詫びは……」

サレンは静かにそう語りかけた。

「些細な言葉の行き違いだった。ソフィアは、私の言葉を信じてくれなかった……」

「ソフィア？　かつての恋人？　ケルビンが殺した？」

唐突な会話の展開に、アーウィンが頭を抱えて言った。

「今の奥さんとの結婚は、ケルビンの両親が決めたものだったんだ。そして、その時ケルビンには将来を言い交わした、ソフィアと言う女性がいた……」

それは、衛兵がサレンに頼まれてかこの事件の記録から引っ張り出してきた、十年前の出来事だった。

「ケルビンは、十年前のある日、ソフィアさんと一緒に子の宿に泊まった。両親の決めた相手とではなく、ソフィアさんと結婚するつもりだと、彼女に説明する為に。でも、ソフィアさんはケルビンの言葉を信じなかった。そして、彼女は自ら生命を絶ってしまった……」

十年の歳月は、その事件を忘れ去らせた。しかし、記録には残っていたと言うわけだ。

「このイン・シルバーフォックスに幽霊が出ると聞いて、わざわざ

やってきたのか」

ようやく納得したらしい様子で、アーウィンが言った。再び頷いて、サレンは言葉を続けた。

「貴方が持っていた毒は、自らの生命をため……自分も幽霊となって、ソフィアさんに詫びる為。違いますか」

「そう……気づいていたのか……いずれにせよ、私はここで死んで、ソフィアに会うつもりだった。ソフィアには、わかって欲しかったのだ……」

ケルビンがそう言った時、闇の中に、もう一つの青白い光が浮かび上がった。

それは寂しげな雰囲気の、うら若い女性の幽霊だった。

「おお、ソフィア……」

ケルビンは声を湿らせた。そして、彼は立ち尽くす人間達に言った。

「私は、お前と一緒になるつもりだったんだ。どんな事をしても……」

ソフィアの幽霊は何もいわず、ひっそりと微笑んだ。

「いまからでも……遅くはない。これからやり直そう」

頷いたソフィアは、差し出されたケルビンの手をそっと握り返した。

二つの青白い人影が、ゆっくりと一つに重なり、薄れていく。

「私を殺したその男を、恨んではいない……その男が殺さなかった所で、私は自ら死を選んでいたのだから……私は生命を失った代わりに……」

ケルビンの言葉の途中で、一つになった青白い人影は輪郭を崩し、消えていった。

そして、部屋には闇だけが残された。

その翌日、ようやくアーウィン達は『イン・シルバーフォックス』を後にすることが出来た。

絡み合った二つの事件を、僅か一日で解き明かしたのだから、まずまずと言うべきかも知れない。

事件の真相は、アーウィンは達が着き止めたとおりであった。多額の借金を抱える『イン・シルバーフォックス』の主人は、裕福そうな身なりをしたケルビンに目をつけていた。彼が幽霊に執着していると知って、幽霊の仕業に見せかけて殺そうと計画したらしい。

そしてケルビンが携えていた毒は、彼が自ら生命を絶ち、自分が死なせてしまったかつての恋人に、幽霊となって侘びを言うつもりで用意した物であった。

主人の変装による偽物の幽霊と、過去から訪れた本当の幽霊。それらがいりまざっていたため、ややこしくなったのだ。

だが、何はともあれ、事件は解決した。

「さあ、行こうか、みんな」

旅人達の街道を作ったアルムス達の末裔パーミルを加え、四人となったアーウィン達は、昼下がりの光を浴びながら、街の通用門へと歩き始めた。

遥か西を目指して。
次の目的地は湖岸の王国ザレスだ。ロザミアからは、およそ二週間ほどの道のりである。

「あの二人は、見えざる星々になったんだろうか」

サレンが口にしたのは、カルラディアで信じられている死者の行く末だった。死者の魂は天に昇って見えざる星となり、この世界を観続けるのだ。

「それにしても、今回はマイラとサレンに世話をかけっぱなしだったな」

いままで仲間のやり取りを聞いていたアーウィンが、溜息混じりに言った。

「なあに、そのうち、アーウィンの剣の腕が必要な時が来るよ」

柔らかい金髪を揺らして、サレンは笑った。

「そうそう、仕方ないよ、アーウィン。あんたは、頭を使うのは不得意なんだからさ」

マイラのからかいに、アーウィンは何か答えようとした。しかし反撃の言葉が見つからなかったので、彼は黙って苦笑しただけだった。マイラのちょっとした性癖のことを、アーウィンも、そしてサレンもまだ知らないのである。

「どうしたんだい、パーミル。さっきから黙っているけど」

気遣うように、サレンが黒髪の少女を見つめていった。

「あ、いえ。なんでも……」

（あの夢は、何だったのかしら……ケルビンさんたちのこととは、関係がなかったみたいだけど……）

単なる夢で片付けるには、異様なほど現実感のある夢だった。

あの黒い長衣を纏った者から発せられる禍々しい気は、今でも、ありありと思い出させるほどである。

悪魔に背筋を撫でられたような寒気を、パーミルは覚えた。

（あの夢はもしかして、私の未来を……）

ふと心に浮かびかけた思いを、彼女は慌てて振り払うのだった。

自由騎士アーウィンの物語　第一章「アルムスの末裔と幽霊騒ぎ　後編」（後書

後編書き上げるのにかなり苦労しました。
次回は自由騎士アーウィンの物語ではなく、別の冒険者の物語をアップしたいと思います。
アップ予定は９月末か１０月上旬予定です。
これからもよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5709n/

ソード＆マジック・ワールド

2010年10月11日05時15分発行